

# Vol.122 ▶ VOICE OF HANDBALL

## 久保 弘毅

**PROFILE** 1971年生まれ。アナウンサー時代にハンドボール中継に携わり、8年連続でプレーオフ男子決勝を実況。その後フリーのスポーツライターとなり、ハンドボールやアマチュア野球などの取材を続けている。

## 送球の昂、 体質改善編

### ～櫛田亮介監督と 三重バイオレットアイリスの1年～

今季から就任した櫛田亮介監督のもと、これまでと違う姿を見せている三重バイオレットアイリス。その変化の内実を追った。

#### ワクワクするチームに

三重バイオレットアイリスの評判がいい。選手たちが楽しそうにハンドボールをやっているだけでなく、周りにいる人たちからもワクワク感が伝わってくる。長く見ていた人間からすると「明らかに変わったな」と思えるし、初めて見た人にも「なにかが起こりそう」な期待感を提供できている。いい意味で「周りを巻き込む」エネルギーがチームに出てきた。

昨年末の日本選手権では、インカレ女王の大体大に勝利した。選手個々のポテンシャルで言えば、将来の日本代表候補が揃う大体大の方が優れていたかもしれない。試合中には司令塔の加藤夕貴が大ケガを負うアクシデントもあった。それでも最

後まで明るさを失うことなく、全員で勝利をつかんだ。

その後、大体大戦を観戦したある大学4年生から「三重でプレーしたい」との応募があったという。志望動機には「こういう楽しそうなチームもあるんだ。私もその一員になってハンドボールを続けたい」といった率直な思いが添えられていたと聞く。もちろん楽しいだけのチームではない。クラブチームだから練習時間は限られてしまう。企業チームのような寮や専用体育館もない。しかし今季から就任した榎田亮介監督は「クラブチームでやる意義」を選手とともに考えながら、今まで足りなかった部分を的確に補っている。

る。「寮がない」マイナス要素が、「いいところ取り」のプラス要素に転換した。

また榎田監督は選手の職場にもできる限り足を運び、選手を抱える会社がチームになにを求めているかをヒアリングしている。「選手を採用していただき、ありがとうございます」は最低限の話。会社もなにかしらのメリットを期待しているはずだし、会社側の求めているものが明らかにになれば、今後はより多くの地元企業に売り込みをかけられる。

頼もしい「相棒」も現れた。かつてドイツ・エムスデッテンでプレーしていた梶原晃が、今年2月から三重のビジネス・マネージャー（以下、BM）に就任した。ドイツでフロント業務にも携わっていた梶原BMは「スポンサーから1万円いただいたら、1万1円以上の価値をお返しする」意識で、チーム運営に取り組んでいる。

この感覚は三重に限らず、日本のハンドボール界にまだまだ欠けている部分。プロ意識やビジネス感覚などで榎田監督と共鳴できる梶原BMの加入は、今季一番の「大型補強」かもしれない。

### 明るくていいねいな変態さん？

チームの環境が整備されてきた。それ以上に大きく変わったのは、選手1人ひとりの表情であり態度だろう。榎田監督は定期的にメンタルトレーニングの講師を招いて、選手の心を整えてきた。

試合前のアップでは「あっち向いでホイ」で大はしゃぎ。ファンの声援には親指を立てて笑顔で返す。試合で得点を決めたら高校生のようなガッツポーズ。円陣の最後は、合言



「あっち向いでホイ」で盛り上がる (写真は池原)

葉の「スーパードライオレットソウル」で締める。

すべてがチームの雰囲気をよくするためのルーティーン。「決め事」ではあっても、全員が全力で楽しんでるから「やらされ」感がない。

ある試合で、キャプテンの漆畑美沙がこんなことを言っていた。

「私たちのテーマは『変態』です。仮に試合に負けたとしても、相手に

『次は三重とやりたくない』イメージを植えつけたんです。『こっちはリードしているはずなのに、なんで三重の選手は笑っているんだらう？』『試合中ずっとニコニコして、なに考えているんだらう？』

そういう不気味さを印象づけるためにも、コート上もベンチも全員が60分間笑顔でいようとしています」

とても興味深いアプローチだ。目の結果に一喜一憂しては試合に勝てない。だから多くのアスリートは、プラスでもマイナスでもない「ゼロ」の世界に収束していく。ポーカーフェイスは代表例と言える。それを1試合とおして「プラスだけ」にするのだから、かなり変わった態度、すなわち「変態」と呼ぶにふさわしい。

選手だけでなく、榊田監督もメンタルトレーニングの教えに忠実に指導している。選手とともに喜び、ハンドボールを理詰め教える。理不尽にどなったり、選手の人間性を否定するような発言はいつさいない。ただしネガティブな感情を表に出しやすかった選手には真正面から向き合い、「これ以上仲間を裏切るような言動はやめてくれ」と言っている。

榊田監督は言う。「育てながら、学びながら、クラブも選手も成長していき、その過程を楽しんだ先に勝利があり、プレー

オフや日本一も見えてくると信じてやっていきます」

限られた練習時間で成果を出すために、榊田監督は「心」の部分に着目した。試合に負けたあとのミーティングでも「負けたから悪いことをしたわけでもないし、『すいません』と言う必要はない。精いっぱいやった結果なんだし、これでプレーオフに行けなくなったわけでもないんだから」と、胸を張って会社に報告するよう選手たちに伝えている。

今までの三重の選手は、負けたたびに卑屈になり、その反動で他人に対して求め過ぎるところがあった。結果の受け止め方、心のあり方さえ理解すれば、そういった感情の起伏はなくしていける。もちろんそのためには、全員で正しいことを日々積み重ねていく大前提がある。

「変態」と並ぶもう一つのキーワードは「ていねい」。その日の気分次第で、やるべきことをやらなかったりするのが一番よくない。漆畑はよくミーティングで「1日1日をていねいに過ごしましょう」と、仲間と呼びかけている。



キャプテン漆畑の求心力はリーグ随一

## 引き分けの意味

2月27日のホームゲームが始まる時点で、三重にはプレーオフ出場の可能性が残されていた。その前の週のソニーセミコンダクタ戦で会心の勝利を収め、残り2試合を連勝すれば、ほかの3チームの結果次第では初のプレーオフの可能性があった。

飛騨高山ブラックブルズ岐阜とのホームゲームは、序盤から三重のペースだった。エースの原希美がインにアウトに抜け、ミドルを打ち込んだりと、絶好調だった。1週間前

のソニー戦で阻止率66%だったGK山根エレナも2試合続けての大当たりの後半7分で11-6と、この日最大の5点差をつけた。しかも飛騨高山はエースの金恩恵が負傷してコートに立てなくなっていた。

ところが圧倒的に有利な状況から、三重は自分たちでリズムを崩してしまう。セットOFFの意思統一ができずにフラストレーションを溜めて、大黒柱の原が退場した間の連続失点で、後半21分に12-12の同点に追いつかれた。

24分、三重はタイムアウト明けに、万谷由衣のミドルで得点をあげた。





白子高吹奏楽部とともに

以前は悲しそうな顔でプレーすることの多かった万谷だが、今ではメンタルトレーニングの成果もあり、後輩たちから「ロンさん(万谷のニックネーム)のガッツポーズはなごむ」と言われるまでになった。万谷の一撃で流れを呼び戻したかに見えた

が、直後に三重は失点し、またも追いつかれてしまう。

27分にはキャプテン漆畑がめつたに見られないアウト割りを決めて、またも1点リードを奪ったが、その直後に左サイドからの回り込みを許し、14-14となった。

ムードメーカーとキャプテンのミラクルシユートが出て、決定打にならない。その後GK山根の7mT阻止もあったが、結局14-14の引き分けで試合は終わった。勝ちを逃したことで、三重のプレーオフ進出の可能性も消えてしまった。

普段は一喜一憂しない榎田監督も、この日はやはり気落ちしていたように見えた。

「最後の15分間は、お互いに『あはしてくれ』『こうしてくれ』と言うだけの、以前の三重になってしまいました。チームの文化を変える1年にしよう」と、選手とともにがんばってきたんです。前半にリードしていても、プレー中の表情や動作が、まだ楽しみ切れていませんでした。5点差をつけたところから『逃げ切ろう』という気持ちになって、単発

のロングが多くなりました」

切羽詰まった時ほど、人間の習慣は出てしまう。1年かけて変えてきたのに、最後の場面で「今までの習慣」が顔を出す。5年間在籍している漆畑は、チームの歴史を踏まえて、こう語った。

「勝った負けたは相手がいること。それよりも目に見えない『チームの体質』を変えたかったです。とくにいい試合をした次の試合では、こうなってしまう。先週のソニー戦でゲームプランどおりのいい勝ち方をしたあとに、今日のような試合をしてしまった。2つ続けて勝てないというのは、私たちのスタイルがまだ根づいていないということです」

習慣づけには時間がかかる。榎田監督は「メンタルトレーニングが自動プログラムになれば、あとは100%戦術面に集中できます。無意識のレベルまで落とし込むには、続けていくしかありません」と言っていた。確実にチームは変わった。しかし「そういう意味で、勝ちでも負けでもない『引き分け』だったんでしょ

うね」と、榎田監督は引き分けの意味を受け止めていた。

試合後のミーティングは長くなったが、その後、三重の選手たちは白子高吹奏楽部の演奏会に参加し、サイン会でも笑顔でファンに応じていた。この日は毎年恒例の「ハンドボールと吹奏楽の競演」の日。悔しい引き分けのあとでも、選手たちは今やるべきことに集中し、地元を代表するトップアスリートと呼ぶにふさわしい態度を示していた。

すべての行事が終わると、選手たちはウエイトトレーニングに向かった。榎田監督は「次の試合から一番遠い日に身体を追い込んでおけば、翌日に身体を休めることができますからね」と説明していた。

プレーオフの可能性が消えたからといって、ルーティーンは崩さない。正しいことの積み重ねが、チームの変化や成長につながる。積み重ねてきた歴史はチームの文化となり、やがて周囲にもよい影響をもたらすようになる。

「地域を盛り上げる」というのは、本来そういう意味ではないだろうか。